海外学会報告

Journée d’étude de l’ACEDLE

西山教行

2004年11月19日にパリ第五大学コルドニエ大学センターを会場として，Association des Chercheurs et Enseigants Didacticiens des Langues Etrangères (ACEDLE)はDidactique des langues et LMDをテーマとして研究集会を開催し，五十名ほどの研究者を集めた。ACEDLEとは，CREDIF所長並びにグルノーブル大学教授を務めたLouise Dabèneが，Association Internationale de Linguistique Appliquée (AILA)の国内組織としてフランスに設立した学会だが，AILAにおけるフランス語の地位低下に伴い，しばらく休眠状態にあった。しかし，近年になり執行部の刷新により活動を再開し，現在はFLEの研究者を中心とした言語教育学研究者の糾合する組織へと再編されつつある。

今回の研究集会は，2003年度よりフランスの大学に導入されたヨーロッパ共通学位制度License, Master, Docteur (LMD)と言語教育学の関連を高等教育の教育研究組織の現場から検討するものであった。

LMDとは，Licenseを三年，Masterを二年，Docteurを三年の標準年限と定めるEU加盟国に共通の学位制度で，各国の高等教育機関の品質保証を狙うとともに，単位互換を容易にし，学生の移動性の推進をはかるもので，これまでそれぞれ一年間であったMaîtrise, DEA, DESの取り扱いに相違がある。MaîtriseをMaster 1として共通基幹科目とすることにより，DEAをMaster 2 recherche, DESをMaster 2 professionnelと再編成し，従来の制度との整合性を図っている。また，Licenceレベルでの外国語教育の充実も改革の一つで，その成績をMasterへの進学要件とすることも検討されている。

このような大学改革の流れにあって，外国語としてのフランス語教育学の課題は少なくない。言語教育学を学部教育にどのように統合するか，言語教育学は理論と実践の連携に成立する学問分野だけに，実地研修は必須であり，その制度化と運用は焦点のひとつとなる。このような関心から，いくつかの大学の事例が報告され，将来の展望を模索した。

パリ第三大学では，ドイツ語，英語などの他言語専攻やフランス近現代文学専攻との間に一種の副専攻制度を導入し，他専攻の学生が外国語としてのフランス語教育学の単位を履修することにより，二つの学位を同時に取得できるよう制度改革を進めている。人的資源に制約を抱える地方の中規模大学（アンジェ，ルマン，トゥール）では，共同指導体制を確立し，連携大学の教員による修士論文の指導を可能とした。初等教育の教員養成にあたるInstitut Universitaire de Formation des Maîtres (IUFM)における言語教育学の位置づけも，この大学改革の中で再考を迫られている。初等教育への外国語教育が導入されたことから，外国語教育に対応した教員養成が喫緊の案件となっているが，IUFMでの外国語教育は理論実践ともに多くの課題を抱えている。予算措置が不十分なことも併せて，これまでIUFMでは教員養成において言語教育学の意義やその研究成果が充分に周知されてこなかったことも言語教育学の地位の確立を阻害しているという。また， Institut National des Langues Orientales (INALCO)は，

これまで特殊言語の教育研究に特色を発揮してきたが，多言語・多文化教育をキーワードとするFLEの修士コースを新設することにより，フランス語教育学の領域にあらたな一歩を刻みつつある。

研究集会は，LMD制度のもとで，言語教育学の将来を展望するシンポで閉会した。言語科学との共生と差異化を図りながら，言語教育学の正統性をどのように主張することが可能か，そのための戦略として国際ジャーナルの刊行や社会科学との協働も改めて訴えられ，学際的分野としての言語教育学の地位を確認することとなった。

なお本学会は紙媒体による定期刊行物を発行しておらず，ホームページによる情報提供が学会活動の重要な柱となっている。サイトのアドレスは以下の通りで，研究集会や新刊案内，博士論文紹介などがみられる。http://acedle.u-strasbg.fr/

（新潟大学）